

女川のまちづくり　これまでとこれから

「これまで」編

---

女川復興まちづくりデザイン会議  
東北大学 准教授 平野勝也

復興を手伝うに当たって考えたこと

## 時を繋ぐ

---

- 人間は、環境との結びつきで生きている。
  - ex. 「住めば都」 結びつきが強いことが都となる
- 津波が奪ったものは、「生命・財産」だけではない
  - 折り重なる記憶の多くが失われた

# 時を繋ぐ

---

西欧の街は人工物が中心  
日本の街は自然と共生

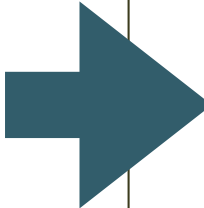
「流された」と諦めるのは早計  
残ったものを大切に  
自然との関係性の再構築



持続可能性が重要

# 時代は「都市開発」から「まちづくり」へ

	都市開発	まちづくり
目標	社会経済指標	愛着・誇り
事業の性格	大規模・単一 単目的 <b>単一効果のデザイン</b>	小規模・複数 多目的 <b>相乗効果のデザイン</b>
事業の 主役	事業主体	住民



稼ぐまちづくり



稼ぐこと = 持続可能性

コンパクトな街

歩いて暮らせる（歩いて楽しい）街

ネットの普及→モノではなく体験（コト）

→客数よりも客単価

→魅力ある空間づくり

街をつくるのは交通（車・人の流れ）と産業



人口減少時代の到来により、  
渋滞混雑緩和のための交通分散施策から  
地域価値維持のための交通集中へのパラダイムシフト

交通集中がなければ街の持続可能性は担保されない

## 復興を手伝うに当たって考えたこと

---

- ・時を繋ぐ（自然との関係性の継承）
- ・持続可能性のある街
  - ・コンパクトで魅力ある街
  - ・歩いて暮らせるor歩いて楽しい街
  - ・交通集中によるポテンシャル担保

まちづくりのこれまで

## 公共施設の整備②



【区画道路】(幅員4.0m~12.0m)

:沿道宅地への交通等サービスのための道路整備

【特殊道路】(幅員4.0m、13.0m)

:交通の安全や快適な歩行空間のための歩道整備

【河川改修(二級河川女川)・水路整備】

:雨水排水の処理施設の整備

【駅前広場】

:鉄道と幹線道路との結節点としての広場の整備

【防災公園(清水)】

:津波災害からの防災機能を有する大規模公園の整備

【公園・緑地整備】

:周辺居住者の利用を目的とした公園整備及び緑地保全を目的とした緑地整備

駅前清水線

清水本通線

備切山駅前線

浦宿女川線

女川海岸線

(主)女川社殿線

計画レベルの原案

2012年12月時点の案



女川町中心部のバリューアッププランのコンセプト

どこからでも海が見える  
住みたい、訪れたい、自慢したい風情の創出  
安全・安心・暮らしやすいまちづくり

3つの基本方針

- ①海の大規模に生かす  
あらゆる場合において、海が見える眺望軸と眺望軸を創出する。
- ②中心部の機能を最大限に生かす  
歴史地帯および中心部を軸として人工的な街並みを創出する。
- ③歴史的背景、防災を免れた公共施設等の資産を最大限に生かす  
神社仏閣を含む公園や公共施設等の中心部を創出する。

整備の基本的な考え方

- 数十年に一度は必ず来る津波に対しても壊れないまち
  - ・ 国道27号や市道の山側を築き上げて、数十年に一度の津波にも耐える。
  - ・ 高層・高層などに対しては安全な建物地帯を設けて整備します。
- 観光の真の価値を創出・価値ルートが整備されるまち
  - ・ 多くの人が賞賛するエリアから市街地中心の集合につながる。
  - ・ 道路は3車線分の広幅員を確保します。(駅前広場道路・駅前広場、道の駅、道の山崎駅前、道の駅)
- 子ども大人も遊びのびるまち、遊べるまち
  - ・ 城立の公園や子供遊歩道のネットワークを整備します。
  - ・ 遊歩道からよく見える眺望軸の集合に遊歩道を整備します。
  - ・ 真夏ごとに特色ある公園の広場を整備します。
- 子どもたちが安心して遊べるまち
  - ・ 新しい遊び場・学校地は、特色ある公園・学校地と併設。
  - ・ 公園と学校地の広場でも壊れない高層を整備します。
- まちの真ん中に、生活の拠点が集まるまち
  - ・ 新しい駅前・学校地、駅前遊歩センター、駅前、生活学習センター、保健センター、子育て支援センター、高齢エリア、公共施設、ショップ、交通広場を、駅前遊歩道に沿って集約します。
  - ・ 商業エリアには、市民が活用して、生活利便施設(支那食料品店、飲食店、物販店、土産物産、郵便局、文庫など)の広場を整備します。(道沿、計画地)



計画的な交通ネットワーク

- 道路、駅前等
  - ・ 駅前や市街地内の道路は、幅員が狭く狭い車が多いため、安全な歩道の整備を行います。
  - ・ 主要な道路は、歩道の幅員を確保します。
  - ・ 駅前広場は、歩道の幅員を確保します。
  - ・ 駅前広場は、歩道の幅員を確保します。
- 河川等
  - ・ 27号市道は、平成27年3月に河川一帯の整備計画を策定します。
- バス
  - ・ 駅前広場に合わせ、駅前バスの停留所を新設します。
  - ・ 主要なバスと道路計画について協議中です。
- 駅前広場
  - ・ 駅前広場の整備工事が完了後、形を整備する予定です。

河川、下水道、上水道

- 河川
  - ・ 27号市道は、平成27年3月に河川一帯の整備計画を策定します。
  - ・ 主要な道路は、歩道の幅員を確保します。
  - ・ 駅前広場は、歩道の幅員を確保します。
  - ・ 駅前広場は、歩道の幅員を確保します。
- 下水道
  - ・ 27号市道は、平成27年3月に河川一帯の整備計画を策定します。
- 上水道
  - ・ 27号市道は、平成27年3月に河川一帯の整備計画を策定します。

----- 都市計画軸  
----- 公共施設

# 生活軸・眺望軸の導入

自動車の生活動線を一本に集中  
全ての住宅地に眺望軸

# 生活軸の導入

- ・ 街路型開発

自動車の生活動線を一本に集中  
そこに歩行者空間をつなげ駐車場  
で囲む  
街路を中心にイメージを作る





## 自主的な景観づくり

街は公共空間だけでできているわけではない





## 協調による 使い勝手の向上

街は公共空間だけでできているわけではない

# 女川のまちづくりの特徴

---

- 工<sub>(住)</sub> → 商 → 住という順番
- 二つの中心街を一つに（コンパクト化）
  - 空地リスクを町が負担&徹底した申し出換地
- 生活軸の導入（交通の集中）
- 眺望軸の導入（海が見える街＝自然との関係性継承）
- 街路型開発
- 主体的なまちづくり

# 都市景観大賞 国土交通大臣賞受賞

「しつこいとも思える質の追求」  
(by 高見先生)

大賞 国土交通大臣賞

## 女川駅前レンガみち周辺地区

所在地 宮城県女川町  
地区面積 約6.6ha  
応募者 宮城県女川町、女川町復興まちづくりデザイン会議、独立行政法人都市再生機構女川・福島復興支援本部、おながわまちづくり協議会、オホパル女川町復興復興事業共同企業体、東洋橋・建築研究所、株式会社プラットフォームデザイン、女川駅前商業エリア景観形成推進協議会、おながわレンガみち交流連携協議会

### 地区の概要

平成23年3月11日東日本大震災で発生した津波により、女川町では生活に必要なほぼ全ての機能が失われた。当地区は、新たに生まれ変わった女川町のシンボル空間であり、女川駅前広場とそこから女川湾に伸びる「レンガみち」を軸に商業・集落、交流、公共機能が集積するにぎわい拠点である。

「レンガみち」の沿道には、集客のコアとなる「シーパルピア女川」をはじめ種々の施設が立地し、海への眺望を生かして女川の新たな顔となる景観を生み出している。周辺の自立再建店舗・事業所においても、地域主導型で設立された委員会が、各事業者と建物デザインに関する協議を事前に行いながら、魅力的な景観形成に努めている。

拠点施設が揃った平成29年5月の6日には、特別なイベントなしに町人口の10倍を超える7万7千人の来訪者が押し寄せた。また復興まちづくりの先導的モデルとして、多くの人々から注目を集めている。

平成30年4月には、「にぎわい拠点」の第二期造成工事が完了し、更なる自立再建店舗・事業所の集積が図られる。平成32年度には、「レンガみち」延長線の「メモリアル公園」「海岸公園(仮称)」の一部が供用開始予定であり、更なる魅力の向上が期待される。



駅前広場から女川湾を一直線につなぐ「レンガみち」は、女川町中心市街地のシンボル軸として、「海を眺めて暮らすまち」という町の骨格を形成している。「レンガみち」の線形は、元旦の日の出の位置に正確に向けられている。



「レンガみち」の幅員は、4.5+6.0+4.5 (=15m) で構成される。中央部分には、基本と補助的2階に配置し、海への眺望軸を形成している。沿道には木造大層楼が特徴的で集客のコア施設である「シーパルピア女川」が立地し、レンガみちへのデッキ張り出しや舗装の積み出しによって、にぎわいの具象を認めている。

### 審査講評

東日本大震災からの復興まちづくりについては、余りに広い被災地、甚大な被害のため、質より量、質よりスピードといった考え方が一般的とも見える。良好な都市空間、都市景観形成への取り組み姿勢は、ややもすると迅速な復興を掲げる要諦になるのではないかと、否定的とまでは言わないが、避けられているようにさえ見受けられる。そのような状況、高層の中スピードとともに質を追いかけ、それを実現させた女川町の復興事業は稀有な例と言えるだろう。応募地区は復興後の女川町の中心となる地区で、この地区を含む広い地区における大胆な区画整理手法の活用がこの事業の軸を据えている。この復興まちづくりでは、居住地区を高台に移転させる必要性から、低地部は非居住系の利用となり、そこにあった被災者の土地を高台と入れ替え、駅前この地区に町有地をまとめることで、駅前商業地区を一歩く実現した。その上で、デザインチームによる「しつこいとも思える質の追求」を通してガイドラインに基づく個別建物の誘導など、良好な都市空間実現のためにかけられた大きなエネルギーを感ずる。まさにゼロから作る中で、できる限りのことを限られた時間の中で実現した。この事業の核図を作った野良をリーダーとする行政、これに志したUR及びその実働部隊となったコーディネーター、多彩なデザイナーたちの見事な協業。今回の復興事業で二つ目があるのかは疑問であるが、まさに復興都市デザイン、復興事業による景観形成の優良事例といえよう。(高見)



駅正面を人の空間として開放し、「レンガみち」と一体的にデザインされた駅前広場。駅の北側には防災広場と「女川フェーチャーセンター Camax」を配置し、大人から子供まで、町内外の人々がにぎわい、集える空間を創出している。



「レンガみち」を軸とした緑道が、式の出席者だけでなく、町民や観光客も一掃になった新空間を盛大に祝う。景観が一掃となって作り上げた都市空間が、皆に愛され、笑顔あふれる場となっている。

こうしたことは、表面的な話でもある

# 女川まちづくりの本質

- ・ 壊滅的な被害から、もう一度、愛する「女川のために」、借金背負ってでも再興すると「覚悟」を決めた町民の「強さ」
- ・ そういう若い衆をきっちり支える重鎮
- ・ そうした前向きな空気が新しい「覚悟」を持った人を呼び込み好循環を生む

着任して間もなく、東日本大震災から現在までの町の歩みを知っておかなければと新聞販売店主の阿部喜英さんを訪ねた。

数時間に及ぶレクチャーは衝撃の連続だった。まちづくり会社によるエリアマネジメント、商業地の所有と利用の分離、補助金に依存せず自力で稼ぎ出す地域の循環の創出――。一民間事業者が復興のブランドデザインを一人称で話す。その後も多数の関係者に話を聞いて回ったが、やはり全員が町の復興を「自分ごと」として語るのだ。「女川の復興過程はただ事じゃない」と直感した。

岩波ブックレット No.981

「3.11を心に刻んで2018」 岩波書店編集部編  
河北新報社（関根梢） 「Ⅱ 復幸の設計図」 p118